

第3章 大宮壳神社所蔵の境内出土遺物

向井 佑介

はじめに

大宮壳神社は京丹後市大宮町周枳^{すき}に所在し、ながく丹後国二宮として信仰されてきた。古代においては『日本三代実録』の貞觀元年（859）に神階授与の記事がみえ、また『延喜式神名帳』（927）には「大宮壳神社二座名神大」と記される。これに対応して、平安時代の木造神像2躯が当社に伝わっている。また、境内には徳治2年（1307）の石燈籠が現存するほか、「周枳宮 承安四年」（1174）の銘をもつ銅磬や「正式位大宮賣大明神／從一位若宮賣大明神」と記された中世の木製扁額が伝わり、この地における長い歴史の一端を伝えている。さらに、境内とその周辺からは弥生時代の土器や古墳時代の祭祀遺物が出土することが知られ、もともと弥生時代の集落であった場所が、やがて古墳時代に信仰の場となり、さらに神社として整備されていったことがうかがえる。

神社は竹野川中流域右岸の段丘上に立地し、高尾山南麓に源を発する竹野川が北へと流れを転じて形成した中郡盆地の東南部に位置している。神社の南およそ700mの尾根上に分布する左坂墳墓群と同1300mの丘陵上に位置する三坂神社墳墓群は発掘によって弥生時代後期の墳墓群であることが確認されており、つづく古墳時代には左坂古墳群・有明古墳群などが築造され、飛鳥・奈良時代にも有明横穴群・大田鼻横穴群などが造営された（伊野2001）。造営数の多さと造営時期の長さという点で、丹後でも屈指の墳墓・古墳群が分布する地域ということができ、これらを造営した人びとが、神社成立以前の祭祀と神社の草創に何らかのかたちで関与した可能性は十分に考えられる。

神社境内に建設された郷土館には、境内から出土した土器類のほか、旧大宮町内の各所より将来された縄文時代の磨製石斧、弥生時代の土器、古墳時代の須恵器・土師器・鉄器、中世の経筒などが収蔵・展示されている。その多くは、耕作や開発などにともなって出土した資料を、近隣住民が持ち込んだものと考えられ、神社が地域の文化財を保管する博物館としての機能を担ってきたことがわかる。こうした状況は各地にみられるものの、学校や神社などが保管する文化財について、その全体像が十分に把握できていないことが全国的な課題となっている。

このような問題をうけて、京都府立大学文学部歴史学科では、京丹後市教育委員会の協力のもと、平成26年度に大宮壳神社所蔵の考古遺物や古文書などを整理して郷土館の展示をリニューアルし、平成27・28年度には地域貢献型特別研究「京丹後市域の考古資料を中心とした文化遺産の整理と活用」をうけ、境内出土遺物を中心に神社所蔵資料の調査と整理を進めた。以下では、これまでに概報として公表してきた資料も含めて、調査・整理成果の全容をまとめて報告することとしたい。

1. 資料の来歴と調査の経緯

大宮壳神社遺跡が古代の祭祀遺跡として認知されるようになったのは、現在から 100 年あまり前のことである。明治 44 年（1911）、それまで木製であった二の鳥居を現在の石鳥居へと建てかえた際、付近から多くの遺物が出土した（図 2・3）（周枳区 2002）。これに関連して、東京帝国大学の黒板勝美がそれらの祭祀遺物を目にして詠んだという直筆の歌額が当社にのこされている（図 4）。黒板の来社については、大正 11 年（1922）4 月 23 日に現地を訪れ、神社保管の神像や遺物を実見して賛嘆したことを郷土史家の永濱宇平が記録しており（永濱 1932）、この歌もその際に贈られたのかもしれない（京丹後市立丹後古代の里資料館 2017）。このころ、黒板は欧州視察より帰国して史蹟保存の重要性を説き、明治 44 年（1911）に発足した民間団体の「史蹟名勝天然紀念物保存協会」に参画し、大正 8 年（1919）の「史蹟名勝天然紀念物保存法」成立後はその保存会委員をつとめ、また京都府下では大正 6 年（1917）に成立した京都府史蹟勝地調査会の評議員となっている。大宮壳神社をおとずれたのも、こうした一連の活動と無関係ではないだろう。

大正 11 年（1922）8 月中旬には、やはり永濱の案内のとも、京都府史蹟勝地調査会委員の魚澄総五郎と梅原末治が与謝郡と中郡の主要史蹟を調査し、大宮壳神社をおとずれている（魚澄・梅原 1923）。その際、梅原は神社保管の遺物を調査するとともに、境内の試掘調査を実施している。梅原が二の鳥居と拝殿の中間にトレーンチを設定して発掘したところ、地表下 1 尺 5～6 寸までの帶褐赤色砂土層には遺物がなく、その下の厚さ 2 尺ほどの黒色土層から土器などが出土したという。この試掘では、鏡形石製品（有孔円盤）1 点と瑪瑙勾玉 1 点のほか、完形の土器 8～9 個と土器破片 10 数個分が出土し、その多くは小型の土器で大型のものも含まれていたと報告されている。

昭和期に入ってからも、境内の建物設置にともなって、しばしば土器などの遺物が出土している（京丹後市立丹後古代の里資料館 2017）。神社が保管する遺物のなかには「本館建設の際東側地層地下約五、六尺の地中より出土せるもの 昭和四七年九月」という註記カードが付された土師器 19 点、磨製石斧 1 点があり、昭和 47 年（1972）の郷土館建設時に出土したものであることが知られる。また、昭和 63 年（1988）には参道西側駐車場の擁壁設置にともなって京都府教育委員会が立会調査をおこない、平成 12 年（2000）には神社周辺の下水道工事に際して大宮町教育委員会が立会調査を実施し、弥生時代の土器、古墳時代の祭祀遺物、奈良・平安時代および中世の土器などが出土している（橋本 2010、京丹後市立丹後古代の里資料館 2017）。これらの断片的な情報をもとにすると、古墳時代の祭祀遺物は拝殿前方を中心として現在の境内域に分布し、その周辺とくに北側の微高地に集落の居住域がひろがっていたらしい。

大宮壳神社遺跡の出土品のうち、明治期に出土した古墳時代の玉類や手づくね土器などの重要な資料が昭和 39 年（1964）より京都国立博物館に寄託されており、その一部はすでに実測図が公表されている（吉村 1995）。一方、神社にも多くの資料が残されており、梅原報告に未記載のものも多いことから、その全体像の把握と主要資料の実測図作成を目的として、今回の調査を実施した。



図1 大宮壳神社 拝殿と本殿



図2 大宮壳神社 二の鳥居と拜殿



図3 「古代祭祀之地」碑

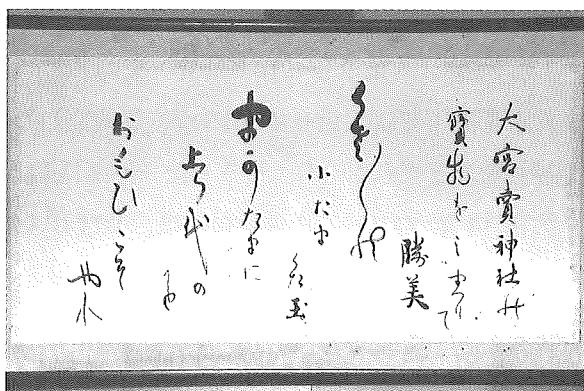


図4 黒板勝美による和歌の揮毫

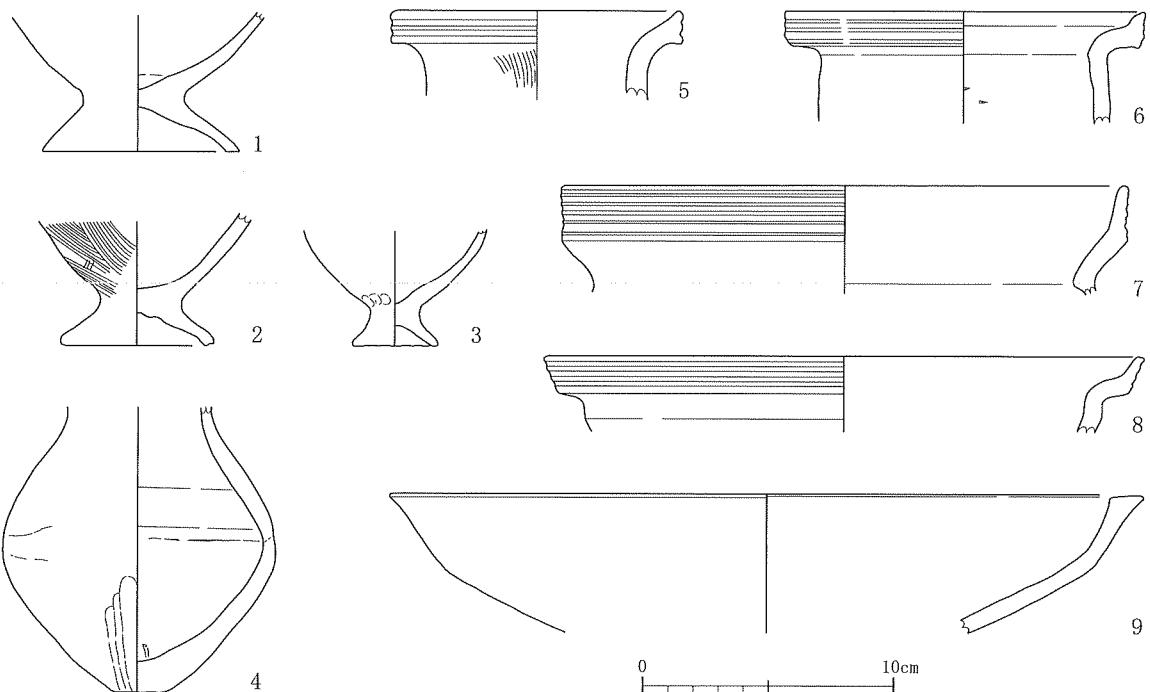


図5 大宮壳神社遺跡 弥生土器 (大宮壳神社所蔵 縮尺 1/3)

2. 境内出土遺物の整理

大宮壳神社遺跡出土遺物のうち、神社に保管されているものは、おもに明治 44 年（1911）に二の鳥居が建立された際に出土したもので、小型の手づくね土器が多い。平成 26 年度から平成 27 年度にかけて、郷土館の展示ケースに陳列されている遺物の整理を進め、その際に作成した土師器の実測図 30 点を一昨年の中間報告に掲載した（向井 2016）。さらに平成 27 年度の後半から平成 28 年度にかけて、郷土館内の棚に別置されている資料のリストを作成し、主要な遺物 60 点の実測をおこなった。遺物の年代と種類ごとにみると、弥生土器 9 点、古墳時代の土師器 70 点（そのうち小型土器 58 点）、古墳時代の須恵器 2 点、古代の須恵器 2 点、中世の土師器 6 点、輪羽口 1 点の合計 90 点がある。以下に、それら合計 90 点の実測図を掲載し、解説していく。

（1）弥生土器（図 5）

1～3 は脚付土器の脚部から下腹部にかけての破片である。いずれもラッパ状にまっすぐひらいた脚部の上に壺あるいは鉢などをのせた器形で、脚部は比較的短い。底部復元径は 1 が 7.8cm、2 が 6.0cm、3 が 3.4cm である。1 と 3 は内外面をナデ調整によって仕上げ、2 は胴部外面にハケメがあり、3 は脚部との連接部分にユビオサエがみとめられる。

4・5 は壺の胴部と口縁部である。4 は胴部の張り出しがよわく、やや細長い器形である。胴部なかばに粘土継ぎ目がみとめられ、下腹部には縦方向のヘラミガキが施される。また下腹部に黒斑があり、胴部やや上に帯状のススが観察される。5 は復元径 11.4cm の口縁部破片で、肥厚させた口縁の外側に 2 条の擬凹線文を施し、頸部外面には縦方向のハケメがみとめられる。

6・7 は甕の口縁部である。6 は復元径 14.2cm の小型甕で、口縁の端部を有段気味に肥厚させて外面に 3 条の擬凹線文を施す。胴部内面には横方向のケズリがみとめられ、外面には部分的にススが付着している。7 は口径 22.5cm に復元される有段口縁の甕で、2 次口縁の外面に 4 条の擬凹線文を施している。

8 は鉢の口縁部である。復元径 23.8cm をはかる。やや外反気味にたちあがる有段口縁をもち、2 次口縁の外面に 3 条の擬凹線文をめぐらす。

9 は高壺の口縁部である。復元径 30.0cm をはかる。口縁端部が平らな面をなし、壺部はなかほどよりやや上で屈曲してゆるやかな稜をなしている。

（2）古墳時代の土師器（図 6・7）

古墳時代の土師器には、比較的大型で一般の集落から出土する土器と共に通するもの（10～21）と器高・口径が 10cm に満たない小型の土器（22～79）がある。後者の大半は祭祀用の土器と考えられ、前者のなかにも祭祀に用いられた土器が含まれる可能性はあるものの、器形から区別することはむずかしい。

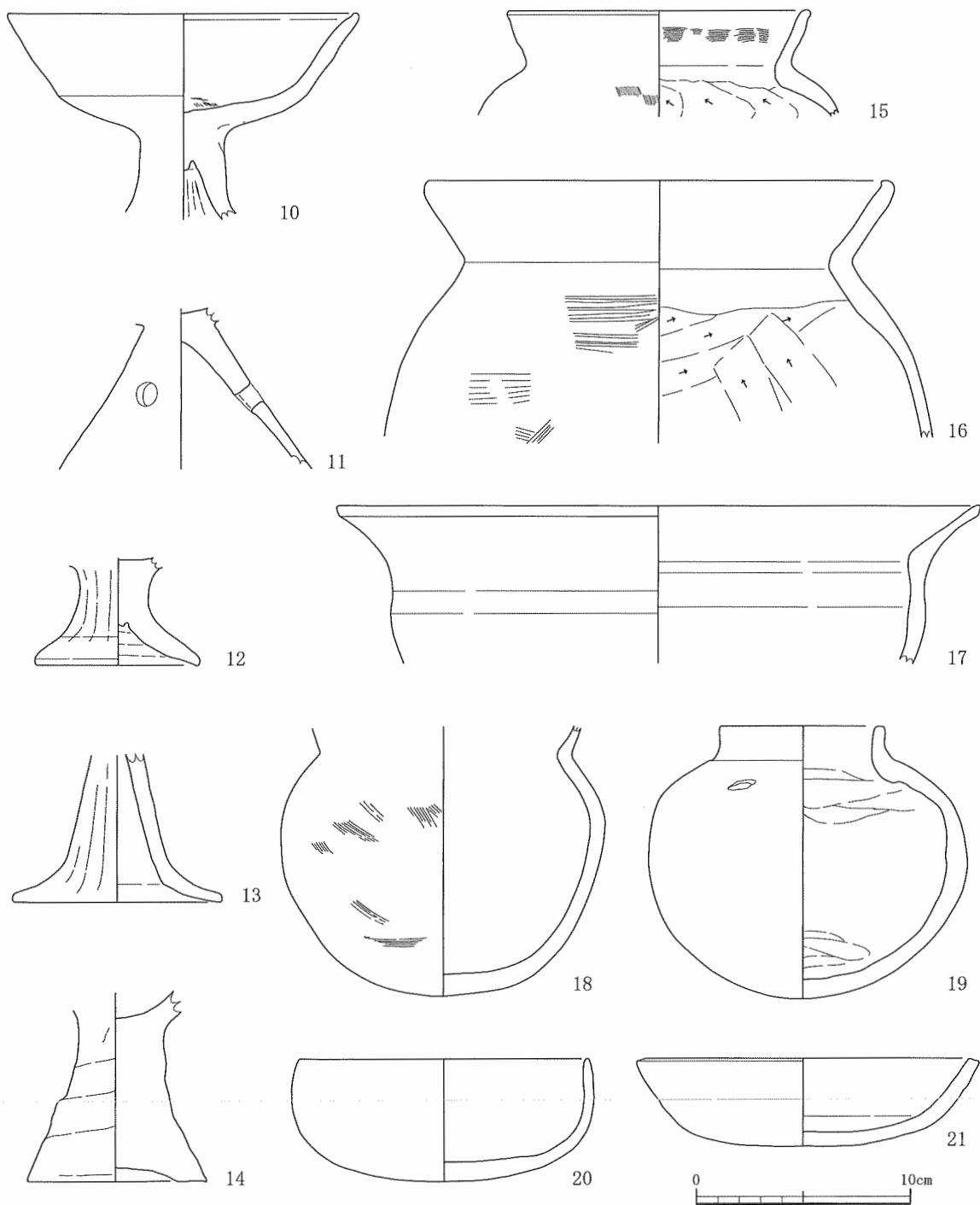


図6 大宮壳神社遺跡 土師器（古墳時代）（大宮壳神社所蔵 縮尺1/3）

10は有稜高坏。坏部は下半が屈曲してゆるやかな稜をもち、そこから口縁がやや外反しながらひろがる。口縁端部内面をわずかにくぼませている。内面中央にはハケメがのこる。

11～13は高坏の脚部。11はまっすぐにひらく脚部のなかほどに、径1.1cmの円形透孔をもつ。12は小型で丸みをおびた厚手の脚部。底部にちかい部分は内外面をヨコナデ調整し、くびれ部分は外面にタテケズリを施す。13は大きくひらいた底部から脚部がまっすぐにたちあがる。外面を縦方

向のナデによってミガキふうに調整し、内面はヨコケズリを施して器壁をうすく仕上げている。

14は底部まで粘土がつまつた中実の脚部で、高坏の可能性もあるものの、器種は明らかでない。外面を螺旋状にナデ調整し、底部の中央をわずかにくばませている。

15～18は甕。15・16・18は球形の胴部から頸部がくの字に屈曲するもので、胴部外面をハケ調整する。15は口縁内面に横方向のハケメを連続させ、肩部外面には縦方向のハケメを施す。胴部内面は下からかきあげるように連続してヘラケズリを施し、器壁をうすくつくっている。16は口縁部に布留式新段階の特徴がみられ、口縁端部をわずかに上方へつまみあげて肥厚させている。頸部の屈曲はゆるやかで肩の張りはややよわい。胴部内面はケズリによってうすく仕上げている。17は復元口径30.0cmの広口の甕で、頸部の屈曲はよわく、なだらかに肩部へつながる。外面はハケメを施したのち、ナデ調整している。

19は広口短頸壺。球形の胴部から短い口縁が直立する。内外面をナデ調整し、丁寧につくられているが、器壁はやや厚い。

20は椀。全体にやや平たい球形を呈し、まるい底部から内湾気味に口縁がたちあがる。器壁は口縁端部にかけて次第にうすくなる。

21は坏。まるい底部から口縁がまっすぐにひろがる。底部から口縁部まで、厚さ0.5～0.7mmでおおむね一定しており、口縁端部は角張っている。

22～73は粗製の小型鉢である。口径6.0cm、器高4.5cmに満たないミニチュア土器の一群（22～65）とそれより大きい一群（66～73）とがある。器形の特徴をみると、丸底で全体が半球形を呈するもの（22～48）と底部が平らなもの（49～73）とがあり、前者はすべて小型の一群に属する。後者はさらに、小型で底部から口縁にかけてまっすぐたちあがるもの（55～60）、丸味をおびた胴部下半からまっすぐに口縁がたちあがるもの（61～63・72・73）、口縁が大きく外側にひらくもの（66～71）などに細分できる。

製作技法のうえでは、大半が指先で成形した手づくね土器で、内面にはユビナデの痕跡が顕著にみとめられる。小型で丸底の22～48は手のなかで成形したと考えられ、22・34のように指先で粘土塊を押しつぶして器形をひねりだしたものと、27・32・33のように粘土の継ぎ目が観察できるものがある。平底の59・70～72は底部に葉脈が転写されており（図8）、木の葉を台として成形したことが明らかである。これら平底の土器は、最初に円盤状の底部をつくり、そのうえに粘土を積みあげていったものであろう。このほか、64・65のように内面にハケメを施し、器壁をうすく仕上げるものも存在し、これは器形と調整いはずれもほかとやや異なっている。

74は尖底の鉢。内外面ともに調整が粗い。

75は小型の甕。底部が1.9cmと厚く、外面をハケ調整した胴部はやや歪んでいる。やや張った肩部から、短い口縁がわずかに外反しながらたちあがる。

76～79は小型丸底土器。球形の胴部から口縁が大きくひらき、端部はまるくおさめる。78の底部中央には焼成後に施された穿孔がみとめられる。79は胴部が扁球形を呈するものである。

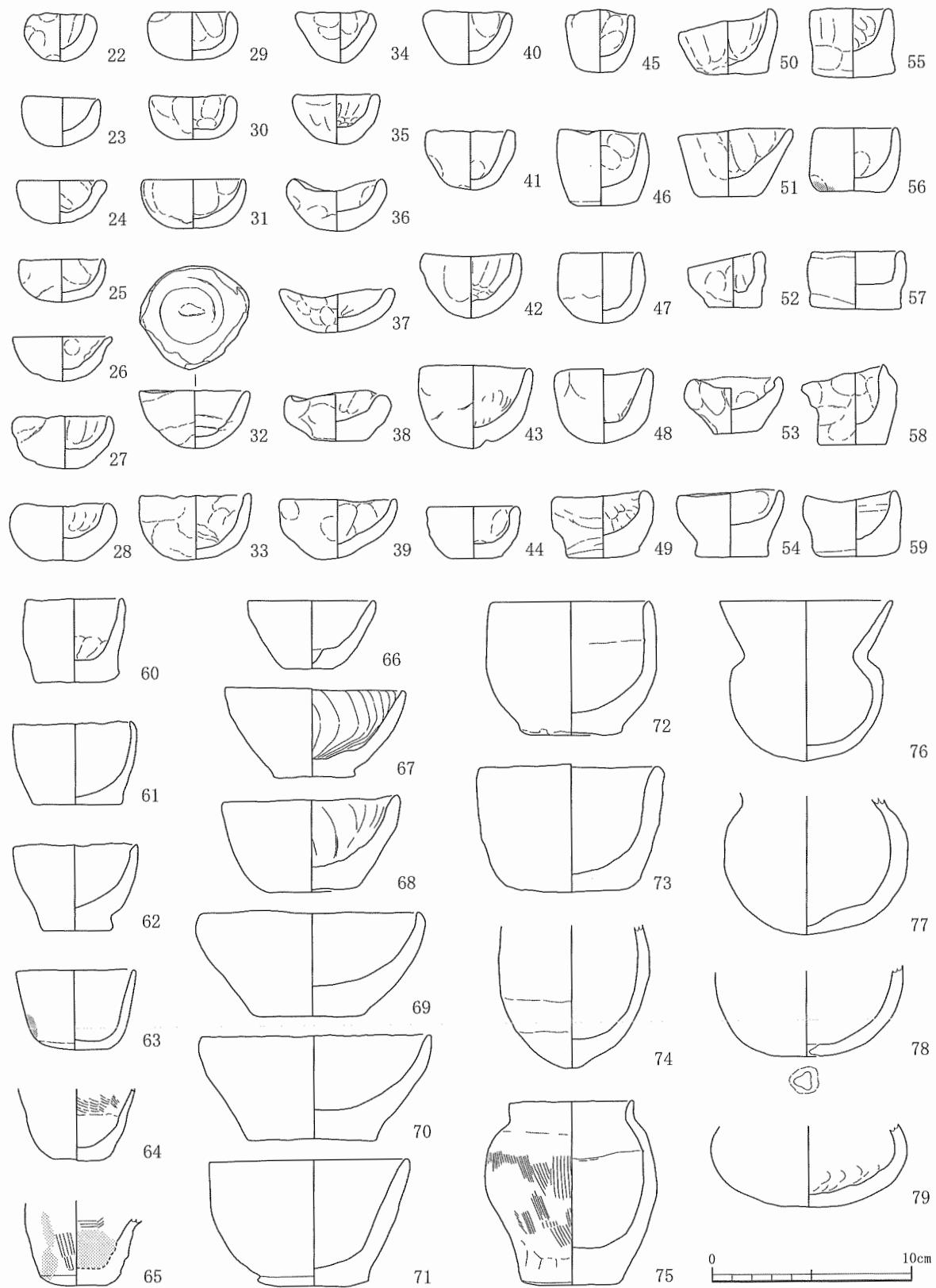


図7 大宮壳神社遺跡 土師器（小型土器）（大宮壳神社所蔵 縮尺1/3）

(3) 須恵器（図 9）

80 と 81 は古墳時代の須恵器、82 と 83 は古代の須恵器である。

80 は高壇の脚部。残存部分の外面上方に櫛描きの波状文があり、下方には一重の沈線をめぐらせ、その下は 3 方向に透孔が設けられていたことが観察できる。

81 は甕の口縁から肩部にかけての破片で、口径 21.4cm に復元できる。口縁の内外面はナデによって仕上げられ、口縁下端にわずかに段をもつ。肩部の屈曲は比較的ゆるやかで、外面は縦方向の平行叩きと横方向のカキメが交錯し、平行叩きに対応する胴部内面には同心円の当て具痕がのこる。

82 と 83 は壺 B 蓋。82 は復元径 13.8cm で、天井部からなだらかに口縁部へといたり、端部をわずかに垂下させる。83 は復元径 14.5cm で、扁平な天井部からわずかに屈曲して口縁部へといたる。

(4) 中世の土師器（図 10）

84～88 は皿。いずれも底部に回転糸切りによる切り離し痕跡がみられる。84 はうすい底部から口縁が外反気味にひろがるのに対し、85～88 は底部が厚く、とくに 87・88 は口縁が水平にちかい角度で直線的にひろがる。

89 は回転糸切り痕をもつ底部のみが残存し、椀の底部にあたる可能性がある。

(5) 鞍羽口（図 11）

90 は鞍の羽口。基部は最大径 8.3cm をはかり、内部に径 2.0cm の円孔が貫通している。胎土はやや粗いものの、外面は縦方向のユビナデによって丁寧に仕上げられている。土師質であるが、現存部分のなかば以上は高熱をうけて灰～灰白色に変化し、とくに炉に接して用いられた先端部分は劣化して損壊している。

3. 境内出土土器の年代

前節にみたとおり、神社が保管する境内出土の土器には、弥生時代・古墳時代・古代・中世の各時期の土器が含まれる。このうち弥生時代の土器は、擬凹線文の口縁をもつ土器群をはじめ、後期を中心とした時期のものと考えられる。京丹後市教育委員会による周辺の立会調査では弥生前期から後期にわたる遺物が出土し、とりわけ中期から後期の資料が多いことから、神社周辺に当該期の拠点集落が存在したことが指摘されており（橋本 2010、京丹後市立丹後古代の里資料館 2017）、境内から出土した弥生土器もそれとかかわるものである。

古墳時代の遺物は、前期の資料をほとんど含まず、中期から後期の資料が大半である。そのなかで比較的ふるい特徴をしめすのが 16 の布留式新段階の甕で 5 世紀初めにさかのぼる可能性があり、また 6 世紀後半以降の遺物をほとんど含まないことから、5 世紀前半から 6 世紀前半において祭祀にかかる活動がなされたと推定できる。祭祀に用いられた手づくりの小型土器群、石製模造品や玉類



図8 大宮壳神社遺跡 小型土器底部の木葉圧痕（左：70 右：71）

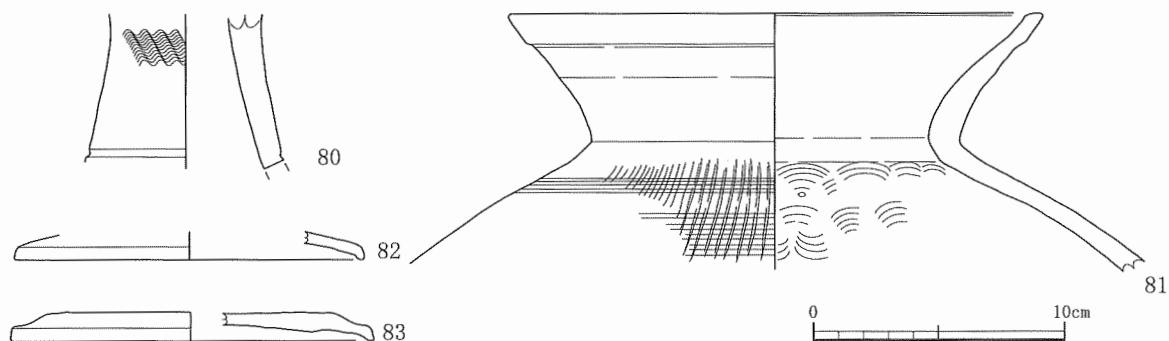


図9 大宮壳神社遺跡 須恵器（大宮壳神社所蔵 縮尺1/3）

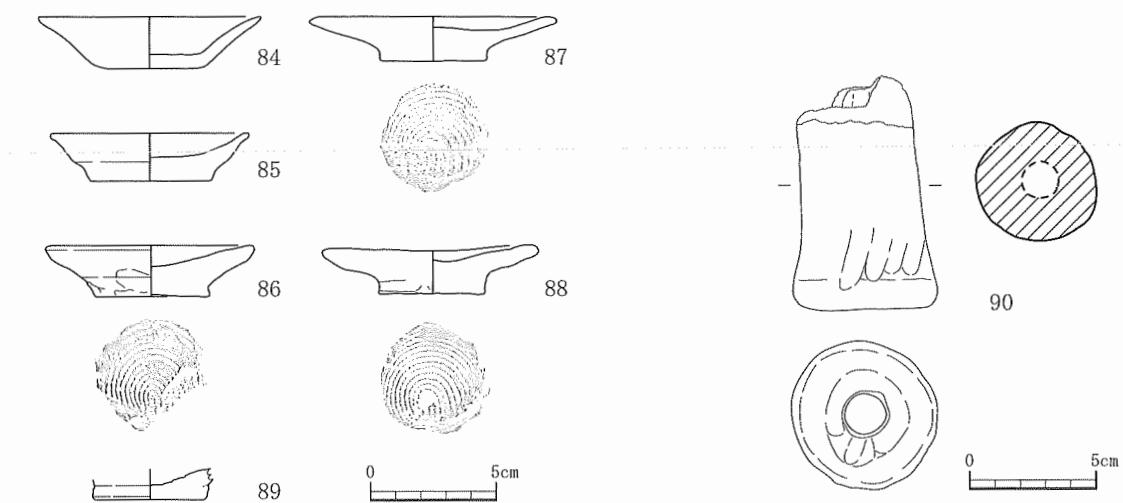


図10 大宮壳神社遺跡 中世土師器
(大宮壳神社所蔵 縮尺1/3)

図11 大宮壳神社遺跡 輸羽口
(大宮壳神社所蔵 縮尺1/3)

は、器形から年代を特定することがむずかしいものの、やはり同じ時期のものであろう。

境内において7世紀以降の遺物は少なく、わずかに須恵器壺Bの蓋2点を図化したにすぎないが、これらはおおよそ8世紀後半のものと考えられる。周辺における過去の調査でも飛鳥・奈良時代の遺物が出土しており、境内の遺物もこれと同様の傾向をしめすことが確認できた。

中世の土師器はいずれも底部に回転糸切りの痕跡をもつ皿・椀などで、中世前期に位置づけられる可能性があるものの、詳細な年代についてはさらに検討が必要である。

おわりに

大宮壳神社が保管する境内出土遺物について、調査・整理した成果を報告してきた。それにより、境内出土遺物の年代は、弥生・古墳・古代・中世の各時期にわたっており、神社近接地の調査によつて明らかにされてきた周辺遺跡の動向と対応していることが確認できた。そのなかで、小型の手づくね土器や石製模造品などを用いた祭祀は古墳時代中・後期、すなわち5世紀から6世紀にかけておこなわれ、とりわけ5世紀後半に盛期をむかえると推定された。

古墳時代の前期末から中期にかけて、丹後においては舞鶴市の千歳下遺跡や宮津市の難波野遺跡でやはり大量の手づくね土器や滑石製品を用いた祭祀がおこなわれており、また大宮壳神社からさらに竹野川をさかのぼった京丹後市大宮町のマンジョウジ遺跡などでも祭祀に供されたと考えられる多数の小型土器が発見されている。なかでも、難波野遺跡に近接して丹後国一宮である籠神社が存在し、大宮壳神社遺跡ものちに同じ場所に神社が成立していることは注意され、神社成立の前史をものがたるふたつの貴重な事例が丹後に存在することは興味深い。それらの周辺遺跡を含めた考察は、後段の菱田哲郎による論考を参照いただくこととし、ここでは大宮壳神社の所蔵遺物について、調査と整理によって判明した事実を報告するにとどめたい。

参考文献

- 安藤信策 1985「丹後の祭祀遺跡」『丹後郷土資料館報』第6号
伊野近富 2001「大宮壳神社周辺遺跡群少考」『京都府埋蔵文化財論集』第4集
魚澄総五郎・梅原未治 1923「大宮壳神社」『京都府史蹟勝地調査会報告』5冊
京丹後市立丹後古代の里資料館 2017『大宮壳神社～古代祭祀とその後の展開～』平成29年度特別展示解説パンフレット
京都府立大学文学部考古学研究室・中世史研究室 2015「大宮壳神社の資料調査と展示」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第1号
周枳区 2002『周枳郷土誌』
永濱宇平 1932「大宮壳神社の昇格に就て」『言行三束』上編
橋本勝行 2010「大宮壳神社遺跡」『京丹後市の考古資料』京丹後市役所
福島孝行 2001「丹後の古墳時代中・後期の土師器I」『京都府埋蔵文化財論集』第4集
向井佑介 2016「大宮壳神社遺跡出土遺物の調査」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第2号
吉村正親 1995「丹後大宮壳神社遺跡の性格について」『大宰府陶磁器研究』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会

表紙の解説

	1 2 3
5 (裏)	4
	(表)

- 1 丹後風土記残欠倉部山 = 高梯郷の中心地
(舞鶴市多門院字梯木林) 新谷一幸氏撮影
- 2 大宮壳神社旧本殿の調査風景 近藤史昭氏撮影
- 3 稲の虫送り (舞鶴市多門院) 新谷一幸氏撮影
- 4 舞鶴湾口から青葉山など東地域の山 松岡秀雄氏撮影
- 5 京丹後市大宮壳神社の境内 菱田哲郎氏撮影

京都府立大学文化遺産叢書 (2008 ~)

- 1 南山城・宇治地域を中心とする歴史遺産・文化的景観の研究
- 2 近世伊予越智島地域における流動する人・物・情報
—御用日記・諸願控の総合的研究—
- 3 八幡地域の古文書と石清水八幡宮の絵図—地域文化遺産の情報化—
- 4 八幡地域の古文書・石造物・景観—地域文化遺産の情報化—
- 5 丹後・宮津の街道と信仰
- 6 城陽市域の地域文化遺産—神社・街道の文化遺産と景観—
- 7 熊野の信仰と景観—宗教遺産学の試み—
- 8 石見銀山域の歴史と景観—世界遺産と地域遺産—
- 9 和束地域の歴史と文化遺産
- 10 八幡・南山城地域の寺院資料と信仰—京都府歴史資料調査—
- 11 舞鶴の文化遺産と活用
- 12 「丹後の海」の歴史と文化
- 13 古代寺院の儀礼・経営に関する分野横断的研究



京都府立大学文化遺産叢書 第14集
舞鶴・京丹後地域の文化遺産

編 集 東 昇・菱田 哲郎
発 行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5
発行日 2018年3月30日
印 刷 サンケイデザイン株式会社
〒603-8165 京都市北区紫野西御所田町14番地2